

「我が家の母はビョーキです」を読んで

「我が家の母はビョーキです」と題する漫画本を読んだ。

著者は漫画家であり、著者が4才の時に母親は夫婦間等のストレスから統合失調症を病んで幻聴、妄想に悩み、幼い時に、幻聴から「裸足であるくよという命令が来たから」と母子で街中を歩かされたことが今も強く記憶に残っているといい、幻聴、妄想故の母からの危険を感じた時は治まるまで隠れていたという。

著者が16才の時に母は離婚し、その後も幻聴等に悩む母と歩んできた31年間で柔らかタッチの漫画で赤裸々に描かれ、また、通院医療費の軽減手続きや障害年金申請、相談窓口や支援機関窓口についても分かり易く触れている。

本書については、「おわりに」で著者が如実に語っていると思うので、一部引用・紹介します。

【 「うつ病」が「ココロの風邪」なんて言われ、たくさんのヒトにしられる病気のひとつになり、私はとてもうらやましく思っています。

「みなさ～ん、ココロの病には「統合失調症（トーチツ）」もありますよ～…」

私の人生のほとんどを「家族」という立場でトーチツと歩んできました。

でも…長い間、トーチツがどんな病気なのか、よくわからないままいたのです。自分から学ぼうとしなかったせいもあったけど、身近で詳しく耳にする機会が本当にありませんでした。

もっと早くトーチツの正しい知識を持っていたら、母も私もこんな大変な状況に陥ることはなかったのだろうな～と思うと、後悔と哀しい気持ちでいっぱいになります。

そんな経緯もあり、たくさんのヒトに「トーチツ」という病気を知ってもらえればと思ったのが、この本を描こうと思ったキッカケでした。

自身の経緯をセキララに描くことで「トーチツ＝コワイ病気」、そんなイメージを強く残してしまったらどうしよう、と不安にかられながらも描くことにしたのは、放置してひどくなっていったわが家の経緯を知ってもらいたかったからです。

長い間、「死にたい」と泣き続けてきた母ですが、最近では「生きていてよかった」というようになりました。

『適切な治療とクスリ、周囲の援助』で回復できるのだなあ」と実感しています。】

読み終わり、辛いこと、哀しいこと等の本音を聴いてくれる人が居るかどうかの問題もあるが、その前に、聴いてもらうためにもまずはそれらを口に出す勇気が何よりも大事かなと、つくづく思った。